

6月29日（日）マルコの福音書8章22～26節

「それから、イエスは再び両手を彼の両目に当てられた。彼がじっと見ていると、目がすっかり治り、すべてのものがはっきりと見えるようになった。」（25節）

---

マルコの福音書は、他の福音書の基本的資料になった福音書であると一般的に考えられています。したがって、他の福音書と異なる独自の記事はきわめて少なく、むしろ共通性が多いのが特徴的と言えるほどです。しかしマルコの福音書だけに記されているイエス様の奇跡の記事が二つだけあります。それは7章31～37節の耳が聞こえず、口のきけない人をいやされたことと今日の箇所盲人のいやしです。

この奇跡において特徴的なことは、イエス様のいやしが二段階においてなされたことです。イエス様が「何か見えますか」と聞かれたのに対し、盲人は見えるようにはなりましたが、まだ完全ではなく、「人が見えます。木のようですが、歩いているのが見えます。」と答えています。そこでイエスは「もう一度彼の両眼に両手を当てられ」ました。「そして、彼が見つめていると、すっかり直り、すべてのものがはっきり見えるようになった」のです。イエス様は、一度触れただけで完全にこの盲人の目をいやすことができたはずですが、なぜ二段階のいやしをなさったのか、その理由は定かではありません。しかし理由として考えられるのは、一回目に触れたことでさらなる盲人の信仰を呼び起こされたのではないかということです。人々に連れられてイエス様のもとに来たこの盲人がどれほどの信仰を持っていたか分かりません。しかしイエス様に触れていただいて、人が見えるようになったことで、目が見えるようになることへのさらなる期待が大きくなっていったのではないかと思われます。ですからこの盲人は信仰と期待をもって「彼が見つめている」（25節）時に、彼の目は完全にいやされたのです。「目があっても見えない」（18節）弟子たちはなかなかイエス様がどのようなお方かを悟ることができませんでした。まさに彼らも目が開かれる必要があったのですが、後になってペンテコステの日に聖霊が降り、聖霊が彼らの心に触れることで、目が開かれて、はっきりとイエス様がどのような方かを悟りました。このようにして、使徒たちもある意味、段階的に目が開かれていく中で、イエス様が誰かをはっきりと知るようにされたのです。

私たちも、弟子たちと同じように霊的に鈍い者ではありますが、イエス様に従う中で、少しずつでも霊の目が開かれていくことを願います。そして、最後には完全に目が開かれて、再臨のイエス様とお会いし、はっきりとその姿を見る時が来ます。信仰をもってその日をとともに待ち望みましょう。

6月30日（月）マルコの福音書8章27～33節

「下がれ、サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」（33節）

---

主はここで弟子たちに「人々はわたしをだれだと言っていますか。」と尋ねられました。何となく唐突感がありますが、31節でイエスがご自分のことについて語られることの備えだと考えられます。弟子たちはこの質問に対してすぐに「バプテスマのヨハネだと言っています。」と答えたり、旧約聖書を代表する預言者として「エリヤ」だと言う人もあり、（マラキ4：5も参照）また「預言者のひとりだと言う人もいます。」と答えています。結局、人々はイエス様を自分たちが待ち望んでいたメシヤではなく、終末時代の先駆けにメシヤの先駆者として遣わされる者ぐらいの認識しかなかったのでしょう。そして今度は29節でイエス様は弟子たちに対して「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」とお尋ねになりました。それに対してペテロが弟子たちを代表するかたちで「あなたはキリストです。」と答えました。まさにイエス様が望まれるとおりの答えをペテロはしました。そしてイエス様のことを完全に理解していない群集にイエス様がローマ帝国の支配からユダヤ人を解放する政治的なメシヤにされることを恐れて、イエス様は「自分のことをだれにも言わないようにと、彼らを戒められた。」（30節）とあります。

31節からイエス様は弟子たちに対して、本来あるべきメシヤの姿、またメシヤに対してなされることを語られました。キリストは、神の国の福音を地上にもたらすために来られました。それは、キリストの死を通して、神と人とを和解させるためでした。しかし、ペテロは、イエスをわきにお連れして、いさめ始めました。それに対してイエス様は「下がれ。サタン。」とペテロに言われたのです。ペテロがサタン呼ばわりされるのは少しかわいそうな気もしますが、サタンが最も願っていたことはイエス様が十字架の苦しみを避けることでした。ですからイエス様はペテロのことばの中にサタンによる誘惑を感じたのでしょう。また「あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」とも言われました。私たちは常に自分の思いや願いではなく、神のみこころを求めべきです。そうでなければ私たちは教会の交わりの中でサタンに利用されて、神のみこころを損ねるような言動をしてしまうことになるのです。教会の中で、また個人的に大切なことは、何よりも神のこと、神のみこころを求め、それを最優先にすべきことをイエス様の姿を通して教えられます。

7月1日（火）マルコの福音書8章34～38節

「だれでもわたしに従って来なければ、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」（34節）

---

34節でイエス様は弟子たちだけでなく、群衆に対して「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」と言われました。私たちはもう一度十字架がどのようなものであったかをここで思い出してみましょう。それは、罪人として刑が確定した者になされるべき極刑でした。しかしイエス様は罪を知らないお方であった（コリント人への手紙第二5：21）にもかかわらず、私たちの罪を贖うために十字架を負い、そして十字架の上で苦しみ、いのちをお捨てになられました。ここで重要なことは、イエス様が父なる神のみこころに従い通されるかたちで十字架を負われたということです。つまり私たちがイエス様に従っていこうとするならば、自分を捨てて、主なる神のみこころに従い通さなければならないということです。それが例え自分にとって望まない道であったとしても、また苦難の道であったとしても、そこを歩いていく信仰が問われているということです。しかし何よりも主イエス様が十字架への道を歩まれて模範を示され、私たちが歩む前にすでにイエス様が十字架を負われたことを私たちは心にとめておくべきです。そして、イエス様は、「わたしに従って来たければ」と呼びかけられます。すなわち、従うか従わないかは、私たちの決断にゆだねられていることであり、その結果としてのいのちを救うか、失うかについては、グレーゾーンはなく完全な二者択一です。

35節でイエス様は、まず「自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い」と言われましたが、神に従わず、神が与えようとしている十字架を負うことを拒み、自分の思う通りに生きている人たちのことで、その人たちは神からの賜物としての永遠のいのちを失うことになりませんが、一方で「わたし（イエス様）と福音のためにいのちを失う者は、それを救うのです」というのは、自らを捨て、神のみこころのままに十字架を負い、キリストについていく生き方をした者に対しては、永遠のいのちが賜物として与えられることが約束されているのです。ですから、36、37節には神のくださる永遠のいのちがどれほど価値あるものかを私たちにもあらためて教えてくれます。

そして38節の「このような姦淫と罪の時代にあって、わたしとわたしのことばを恥じるなら、」というのは、キリストとキリストのことばに従うよりも、世の中や姦淫と罪の時代に流されてしまうことを言っているのです。そのような生き方を続けているならば、「人の子も、父の栄光を帯びて聖なる御使いたちとともに来るとき、その人を恥じます。」とされています。

私たちの生き方はいかがでしょうか。神からの永遠のいのちにまさる賜物はありません。この地上においてすべてを失っても、またどんなに報われなくても、私たちには永遠のいのちが約束されているのです。自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてキリストが歩まれたように歩み出す信仰が与えられるようにともに願いましょう。

7月2日（水）マルコの福音書9章1節

「まことにあなたがたに言います。ここに立っている人たちの中には、神の国が力をもって到来するのを見るまで、決して死を味わわない人たちがいます。」

---

1節のイエス様のことばについて、さまざまな意見が出されていますが、ここを解釈するためには、まずペテロの手紙第二1章16～18節を見なければなりません。1章16節の「私たちはキリストの威光の目撃者なのです。」というのは、マルコの福音書9章2節で、「彼らの目の前でその御姿が変わった」ことをペテロは、キリストの威光を目撃したと言っているのでしょうか。そして、ペテロの手紙第二1章16節では「私たちはあなたがたに、私たちの主イエスキリストの力と来臨を知らせましたが」と言い、その後「私たちはキリストの威光の目撃者なのです」と言います。つまり、ペテロからすると、自分の目の前でキリストの御姿が変わったということ、その衣が白く輝いたその姿は、まさにキリストが再び来臨した時の姿であって、自分を変えられたキリストの御姿を目撃したのは、まさに来臨したキリストを見たことに等しいというわけです。

そう考えますと、キリストの再臨の時に、神の国が力をもって到来するのを見ることとなります。そしてキリストの姿変わりを通して、ペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人は、キリストの来臨の前味を味わったといううことであり、決して他の人が見ることができないものを見ることが許されたということなのです。「決して死を味わわない人がいます」と言われていますが、それから六日後に三人は、姿変わりを通してキリストの威光を目撃することとなり、なぜ弟子たちの中からこの三人が選ばれたのかは分かりませんが、驚くべき特権であることは間違いありません。私たちも一人一人ふさわしい恵みが主から与えられています。そして恵みが与えられていることは、それに応答する責任もあるということなのです。与えられている格別の恵みに感謝しつつ、それにふさわしく応答する者でありたいと思わされます。

7月3日（木）マルコの福音書9章2～8節

「これはわたしの愛する子。彼の言うことを聞け。」（7節）

---

マルコは、イエス様がペテロとヤコブとヨハネの三人を連れて、山に登られた理由も山の名前も記していませんが、2節の「高い山」とは、恐らくヘルモン山ではないかと思われます。すると彼らの目の前でイエス様の御姿が変わり、その衣は非常に白く輝き、この世の職人には、とてもなしえないほどの白さでした。（3節）これは、神の御子としてイエス様ご自身が持つておられる栄光であり、特に白い輝きは、イエス様ご自身の純潔と聖さを現していると言えます。また4節では「エリヤがモーセとともに彼らの前に現れ、イエスと語り合っていた」とありますが、もちろん何を話していたかは分かりません。しかし、イエスはエリヤとモーセにまさる方であり、エリヤが代表する神の預言とモーセが代表する神の律法をともに成就しようとされたお方です。

5節でペテロは、幕屋を三つ造りましょうと提案します。その理由として恐怖に打たれて何を言ったらよいか分らなかったとあります。（6節）ここで私たちが注目すべきことは、イエス様の栄光に輝く姿を見たなら、人は恐怖に打たれるということです。ですから、イエス様ご自身の栄光を輝かせながら再臨される時には、すべての人が恐怖に打たれて、再臨されたイエス様を見ることとなります。しかし、キリストの再臨を待ち望んでいる私たちは、恐怖ではなく、感謝と喜びをもって主を見ることとなります。なぜなら、その時は私たちに対する救いの完成の時であり、主の約束が成就する時だからです。そして7節で主の臨在を示す雲の中から「これは私の愛する子。彼の言うことを聞け」との声がしました。父なる神ご自身が、イエス様の言うことを聞くようにと言われ、イエス様を受け入れ、イエス様に従うことが父なる神を受け入れ、従うことであることをここで明らかにされているということを意味しています。まさにイエス様こそ目に見えない神の最高の啓示であることをあらためて教えられます。私たちも受肉したまことの神、栄光の輝き、そしてその栄光を輝かせながら再び来られるイエス様を待ち望みつつ、この地上にあっては、そのイエス様の御跡に従いたいと思わされます。

7月4日（金）マルコの福音書9章9～13節

「エリヤがまず来て、すべてを立て直すのです。それでは、どうして、人の子について、多くの苦しみを受け、蔑まれると書いてあるのですか。」（13節）

---

9節に「イエスは弟子たちに、人の子が死人の中からよみがえるときまでは、今見たことをだれにも話してはならない、と命じられた。」とあります。これは、回りの人々がイエス様をローマ帝国の支配から自分たちを解放してくれる政治的なメシヤとする可能性があったからです。それは、イエス様が人類を救うために、十字架への苦しみの道を歩むことを妨げる可能性が大いにあったからです。しかし、このイエス様の命令は「人の子が死人の中からよみがえるときまでは」との条件付きでした。つまりイエス様が十字架におつきになって三日目によみがえられた後は、彼らが見聞きしたことを回りの人々に証しする証人とならなければならなかったのです。

弟子たちは「そのおことばを心に堅く留めた」のですが、「死人の中からよみがえると言われたことはどういう意味かを論じ合った。」のです。（10節）多くのユダヤ人と同じように弟子たちも、終わりの日にすべての人がよみがえらされるということは信じていたはずですが、「多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、三日の後によみがえらなければならない。」（8章31節）とイエス様が言われたことの意味を彼らは理解することができませんでした。彼らは、律法学者がまずエリヤが来るはずだと言っていることについてイエス様に尋ねます。（11節）これはマラキ4章5、6節に基づくもので、律法学者たちはエリヤはまだ来ていないので、イエス様はメシヤではありえないと考えていたのです。それに対してイエス様は、「エリヤが来て、すべてのことを立て直します。」と言われました。マラキ4章5節で「預言者エリヤをあなたがたに遣わす。」と言われた目的は、まさにメシヤが来られるための道備えでした。実際にバプテスマのヨハネが現れたことを指して、イエス様は「エリヤはもう来たのです。」と言われたのです。（ルカの福音書1章17節参照）「そして人々は、彼について書いているとおり、彼に好き勝手なことをしました。」とありますが、これはマルコの福音書6章17～29節にありますように、ヨハネがヘロデに兄弟の妻の不法を主張したために牢に入れられ、首をはねることで、妻の思いを遂げさせたことを言っています。バプテスマのヨハネをエリヤとして受け入れず、そのような好き勝手にすることを許すようであれば、同じようにメシヤとして来られたイエス様も人々から受け入れられることなく、拒まれて、捨てられ「多くの苦しみを受け、蔑まれるように」なることを語っているのです。

弟子たちがメシヤであるイエス様について理解できなかったのは、彼らが自分たちのメシヤ像を作り上げ、みことばに書かれてあるとおりにイエス様のことを信じようとしなかったからです。私たちもユダヤ人と同じように、イエス様に対して自分のイメージ通りのメシヤ像を作り上げてしまっていないでしょうか。むしろ苦難のしもべとしてのメシヤであるイエス様に従っていける信仰がありますか。

7月5日（土）マルコの福音書9章14～16節

「イエスは彼らに「あなたがたは弟子たちと何を論じ合っているのですか。」とお尋ねになった。」（24節）

---

イエス様は山から降りて、ほかの弟子たちのところに戻られました。すると、大勢の群衆が弟子たちを取り囲み、律法学者が弟子たちと論じ合っていました。ここでの論じ合うというのは、何か意見をお互いに交し合うということではなく、むしろ論争するという意味が近いと思われます。また18節では「それで、あなたのお弟子たちに、霊を追い出してくださいとお願いしたのですが、できませんでした。」と口をきけなくする霊につかれた息子を持つ父親も言っていますので、恐らく、この父親も弟子たちに対して非難めいたことを言っていた可能性があります。そもそもさまざまな悪霊や汚れた霊を追い出しているのは、イエスご自身であって、もともと弟子たちにはそのようなことはできないというのであれば仕方がないのですが、マルコの福音書6章7節では汚れた霊を制する権威を受けられ、13節では多くの悪霊を追い出しているのですから、弟子たちからすれば、なぜイエスによって遣わされていた時にはできたことが、なぜ今はできないのだろうかという気持ちにさせられたはずです。そのような中で、弟子たちは、無力感を感じ、自責の念を持ち、恥ずかしく思っていたかもしれません。群衆は、イエスを見つけると、なぜか非常に驚き、駆け寄って来てあいさつをしました。イエスは彼らに「あなたがたは弟子たちと何を論じ合っているのですか」と尋ねられました。もちろん、これはイエス様がそこで論じ合っている内容を知らなかったわけではないでしょう。そのようにイエス様が尋ねられた一つの理由としては、弟子たちではなく、イエス様自身にその目を向けさせ、弟子たちとの論争を取めようとした可能性があります。それと同時に、四面楚歌のような状況で周りから責められているような中で、弟子たちの目もイエス様ご自身に向けさせ、謙遜にどうにもならない状況を認めて、イエス様ご自身に頼らせようとしたのではなかろうかと思わされます。

私たちは、しばしば自分で何とかできると意気揚々と臨み、うまくできずにクリスチャンとしての面目丸つぶれということもあるでしょう。またうまくできず弟子たちのように周りから責められたり、自責の念にかられるということもあるかもしれません。その時に私たちもイエス様を仰ぎたいと思わされます。「あなたがたは弟子たちと何を論じ合っているのですか。」と言われるイエス様を見上げて、自分のできなかったことをお任せし、自分の無力感や自責の念もすべてご存じの主にお渡ししたいと思わされます。